

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 5 月 24 日現在

機関番号：32670

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15H03208

研究課題名(和文)「場」の語用論モデルの構築：母語話者視点による通言語的実態分析に基づいて

研究課題名(英文) Construction of Pragmatics of Ba: A Cross-linguistics Analysis for Native Speaker's Point of View

研究代表者

藤井 洋子 (FUJII, Yoko)

日本女子大学・文学部・教授

研究者番号：30157771

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,800,000円

研究成果の概要(和文)：3年間の主な研究成果として、(1)John Benjamins社のシリーズの一巻として Pragmatics of Baの出版が決定、執筆を開始できたこと、(2)2016年3月に中国の北京林業大学にて中国語のデータを収集、分析を行い、国内外の学会にて発表することができたこと、(3)『場とことばの諸相』の出版のため執筆、査読を行っていること、(4)国内外の学会での「場」についての企画、(5)海外研究協力者のHanks氏によるコロキウムへの参加、(6)国際学術雑誌からの新しい語用論の執筆依頼、(7)全体を通じて「場」の語用論の構築に多くの進展があったことがあげられる。

研究成果の概要(英文)：The main outcomes of this three-year project are summarized as follows: (1) Writing articles for Pragmatics of Ba in a series of Culture and Language Use (John Benjamin Publishing Co.), (2) The new data collection of Mister O Corpus in Chinese at Beijing Forestry University, transcription of the data, and presentation of the outcomes of the analysis, (3) Writing and reviewing articles for Ba-to Kotoba-no Shoso (Language Practices of Ba) by a Japanese publishing company, (4) The holdings of Panels and Workshops at several Conferences in and outside Japan, (5) Participation of Colloquium for the theory of Ba sponsored by William Hanks, (6) Being invited for submitting a new pragmatic theory to Journal of Pragmatics, (7) overall, the big progress of the construction of Pragmatics of Ba in this three years.

研究分野：人文学、言語学

キーワード：場の語用論 母語話者視点 通言語的実態分析 ミスター・オー・コーパス 西洋・非西洋言語文化 Pragmatics of Ba 場とことばの諸相 言語・文化・相互行為の多様性

1. 研究開始当初の背景

本研究の目的は、空間にある行動主体をはじめ、そこに存在する全てのものを不可分なものとして包括的に捉える「場」の概念に基づく「場の理論」を援用し、世界各地の言語使用に見られる文化的特殊性を、通言語的かつ体系的に解釈するための「場」の語用論モデルを構築することにある。従来の語用論理論は、おもに西欧の言語・文化に依拠して構築されたモデル(「発話行為理論」や「協調の原理」)を「普遍」と想定して発展してきた。本研究ではその前提に批判的検証を加えつつ、アジア、オセアニア、メソ・アメリカ地域の言語使用を実証的に再検討し、言語、文化、(相互)行為の多様性を包含しうるダイナミックな語用論モデルを提案する。

従来の語用論や談話分析での理論化・定式化は、主に発話主体としての話者の行為遂行(Austin 1960, Searle 1969)、協調の原理(Grice 1975)、発話の関連性(Sperber & Wilson 1995)、ポライトネス理論(Brown & Levinson 1987)、談話における情報の流れや認知的状態(Chafe 1987)、テキスト内部の一貫性や結束性(Halliday & Hasan 1976)など、言語使用者個人に關与する推論、認識を中心に行われてきた。本研究では、その閉じた系から踏み出し、世界各地の実際の言語使用における前提や規範の異なりと共通点を探り、言語使用者の共存とグローバル社会での共生をめざす語用論モデルを提唱する。従来このような方向性は、異文化間語用論(Spencer-Oatey & Franklin 2009)、会話/相互行為分析(Stivers, Enfield & Levinson 2010)やマルチモーダル分析(Goodwin 2006, 2009; McNeill 2005)などの分野、あるいは「ヒトの社会性研究」(Levinson 2006)や「付随効果[collateral effects]」(Sidnell & Enfield 2012)といった概念により個別に探求されているが、統合的な研究へと収斂するに至っていない。

この中であって対照語用論的なアプローチにより成果を上げた実例として、マックス・プランク心理言語学研究所の研究者による比較会話分析研究(Stivers, Enfield & Levinson 2010; Sidnell & Enfield 2012)がある。本研究との共通点も少なくないが、そこで用いられた統一的なテンプレートや会話分析の方法論に代わり、(1)各々の言語・文化地域を代表する研究者が「母語話者の視点」から文化的な重要度に応じて抽出した様々な現象を分析し、(2)それぞれに相応しい手法によって「場の理論」の通言語的な有用性を検証する点で異なっている。

この研究の方向性は、本研究の前身においてマルチモーダル分析や人間の相互行為におけるパラメータの模索を通じてなされてきた(Fujii 2012; 片桐 2014)。従来の言語現象の分

析は、いつ、どこで、誰が、何を、どのように行うかを定式化、モデル化することに主眼を置いてきたが、その行為を推進する「なぜ」に対する問いはおざなりにされてきた(井出 2006)。パラメータはその理由を問う方略の一つであり、世界各地の言語使用の固有性を対照語用論的に検証する手段となる。上述の通り、このような流れは語用論的类型論と称されて近年の語用論研究の先端に位置しており(例えば Enfield & Stivers 2007, Stivers et al. 2010, Sidnell & Enfield 2012)、本研究の先見性と有効性を示している。

2. 研究の目的

本研究期間の3年以内に、従来推進されてきた解放的語用論の理念を具体化し、「場の思想」(清水 2003)による世界各地の言語使用の再検討を通じて、東西/南北の分断を止揚した普遍的なモデルとして「場」の語用論モデルを提唱する。

3. 研究の方法

上記の目的に向け、本研究組織では以下の課題の達成に取り組む。

- (1) 既刊の論文(Journal of Pragmatics 特集号 1,2,3号に掲載)に新たな論文を加え、英文で Pragmatics of *Ba* (Culture and Language Use, John Benjamin Book Series) を出版する。
- (2) 多言語比較のための映像データ、Mister O コーパス(日本語、英語、韓国語、アラビア語、タイ語収録済み、日英語は公開済み)に、中国語話者の映像データを新たに追加する。
- (3) 研究の総括的成果として、論文集『場の語用論』(仮題)を出版する。
- (4) 「場」の語用論のモデル化、及び、「場」の語用論の方法論の確立を図る。

研究形態としては、個々の構成員による「個別研究」と組織全体による「共同討議」の両面から進めて行く。「共同討議」については、主に、年度初めに開催する研究会に加え、国内・外における学会で組むワークショップ、シンポジウムなどの発表時に行った。

以下にこれらについて報告する。

4. 研究成果

3年間を通し、上記の研究方法により、個別研究を遂行すると同時に、全体として、以下のような成果を上げることができた。

(1) Pragmatics of *Ba*の出版について

John Benjamins社のCulture and Language Useシリーズの一巻としてPragmatics of *Ba*の出版に向けて、まず、編集主幹を中心に編者(海外研究協力者含む)を交え、編集会議を開催した。西洋とは異なる世界の言語・文化を基にした理論構築とその実践を目指し、非西洋からの発信という新しい取り組みであるため、

慎重に執筆者を選び、執筆依頼を行った。現在の執筆予定者はおおよそ20名となっており、アメリカ合衆国、タイ、韓国、連合王国、ベルギーなどの研究者達によるマヤ語、タイ語、韓国語、中国語、日本語、英語、リビア・アラビア語などについての研究論文が掲載させる予定である。途中、John Benjamins社の全般的な出版方針の変更などの事情のため、当初の原稿締め切りであった平成29年4月を平成30年9月に延期し、現在各執筆者は論文執筆に取り組んでいる。

(2) 中国語のデータ収集と分析について

これまでのMister O コーパスのデータ収集（日本語、英語、韓国語、アラビア語、タイ語）では、東アジアの言語である日本語、韓国語は収集しながらも、中国語については未収集だったことが課題であったが、27年度末にその収集が実現し、28年度および29年度でデータの精緻な文字化ができたことはこの研究課題のデータコーパスとして大きな進展だった。詳細は以下の通りである。

収集日時：平成27年3月4日、5日

収集場所：北京林業大学（北京）

参加者：北京林業大学祝葵教授

実験協力者：北京林業大学

教員と学生26ペア（全員女性）

課題：物語構成課題、ナラティブ課題、自由対話

収集方法：ビデオ収録、音声収録

中国語データ分析とワークショップ

中国語のデータをもとに中国語母語話者、中国語研究者を迎え、中国の言語文化についての知見を得るためのワークショップを開催、また、中国語データをもとにデータ分析セッションを行った。

<ワークショップ開催>

開催日：2016年8月23日、24日

場所：日本女子大学新泉山館2階会議室

講師：北京林業大学 祝葵教授

麗澤大学大学院 井上 優教授

<データセッション>

開催日：2016年8月25日、29日

場所：日本女子大学英文学科会議室

参加者：北京林業大学 祝葵教授

はこだて未来大学 片桐恭弘教授

名古屋大学大学院 望月雄介

日本女子大学大学院生

このデータセッション後、中国語を分析対象としている望月氏、片桐氏、および研究代表者は、それぞれに分析結果をもとに第15回国際語用論学会（於：連合王国・ベルファスト）にて研究発表を行った。また、研究代表者は国内学会の学会誌に投稿を行い、平成30年度出版の巻に掲載予定となっている。

これらのことは、東西/南北の分断を止揚した普遍的なモデルとしての「場」の語用論モデル構築に大きな一歩を踏み出したことになった。

(3) 『場の語用論』（仮題）の出版について

3年間の研究計画当初から出版を目指して進めており、11名の執筆者（1篇は共著）が決定している。「場」の理論を用いた語用論理論の構築という、日本でも初めての試みであるため、理論の構築と外部研究者によるそれぞれの論文の査読を慎重に行っている。なお、論文集タイトルを『場とことばの諸相』と変更予定である。

(4) 「場」の語用論のモデル化、および方法論の確立について

本研究課題の目標である「場」の語用論モデルの構築については、様々な取り組みを行ってきた。以下に記す。

Workshops on Linguistics of *Ba*

平成27（2015）年7月に The 2nd International Workshop on Linguistics of *Ba*（於：はこだて未来大学）にて、研究分担者である片桐氏を中心に、研究代表者、研究分担者および超領域からの外部研究者によるワークショップを行い「場の理論」についての考えを深めた。

同様に、平成28（2016）年3月の The 3rd International Workshop on Linguistics of *Ba*（於：早稲田大学）では、海外研究協力者のWilliam Hanks氏を招聘し、「場の理論」についての講演、および研究代表者、研究分担者、さらには超領域分野の研究者による研究発表を行った。「場」の語用論のモデル化、および方法論の確立に関してはこのワークショップで、世界を代表する言語人類学者であるHanks氏の「場の理論」についての講演が、西洋に向けて発信する大きな一歩となった。

平成27年度と平成29年度の国際語用論学会にてそれぞれに「場」の語用論に関するパネルを企画、研究代表者、研究分担者、海外研究協力者が集まり、研究発表、および理論の構築についての討論の機会を得た。

タイ語、中国語に関するワークショップ

平成27（2015）年11月に、解放的語用論に関するタイ語と日本語のワークショップを開催（於：日本女子大学）。タイ語に関してはタイからの留学生、およびタマサット大学のSongthama Intachakra氏によるタイの言語文化およびタイ語と日本語の比較研究についての発表があり、非西洋言語であるタイ語と日本語の言語文化についての意見交換を行った。

同様に、平成28（2016）年8月に「ミスター・オー・コーパス研究&中国語データ分析ワー

クシヨップ」を開催（於：日本女子大学）。麗澤大学から井上優氏、北京林業大学から祝葵氏を招聘し、講演を依頼。中国語の言語文化についての知見を得た。このことは、「場の語用論」のモデル化、方法論の確立に更なる示唆を与えてくれることとなった。

Colloquium “Translation, Interaction and Context: Cross-disciplinary Perspectives
平成29(2017)年10月11日～14日、パリで開催されたFyssen Foundation主催コロキウムにおいて、研究分担者の井出氏、片桐氏、海外研究協力者のHanks氏が「場」の概念に関して研究発表を行った。コロキウムのディレクターHanks氏をはじめ多くの参加者の場への理解と関心の高さを確認し、西洋に向けての「場の語用論」モデルと方法論の提示が喫緊の課題であることを改めて確認することとなった。

Journal of Pragmatics が2019年出版予定の特集号 ‘Quo Vadis Pragmatics?’ (「新しい語用論の方向を求めて」)への寄稿依頼を受ける。これからの語用論の在り方を巡り、諸説を提示する論集に本研究プロジェクトが招待されたことは、西欧の規範とは異なるオリジナルなディシプリンを日本から発信することを求められていることを示すものであり、本プロジェクトがこれまで遂行してきたことが認められていることの成果と考えられる。

5. 主な発表論文等 (研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計14件)

- 1) 藤井洋子「日英語比較による英語の指導 - ことばへの気づきを喚起する英語教育を目指して」教化教育法に関する研究 (日本女子大学編), 27 - 37. (2017)(査読無)
- 2) 井出祥子「敬意表現と日本文化 - 『場の考え』からのアプローチ - 」日本語学 36(6), 2 - 8. (2017)(査読有)
- 3) 堀江薫 書評論文「『語用論の基礎を理解する』(Gunter Senft (著) 石崎唯人・野呂幾久子 (訳) 2017年 開拓社)」語用論研究 19, 100 - 105. (2017)(査読有)
- 4) 片岡邦好「言語/身体表象とメディアの共謀的实践について - バラク・オバマ上院議員による 2008 年民主党党員集会演説を題材に - 」社会言語科学 20(1), 84 - 99 (2017) (査読有)
- 5) 早野薫「修復の組織」日本語学 36(4), 82 - 92. (2017)(査読有)
- 6) Hayano, Kaoru “When (not) to claim epistemic independence: The use of *ne* and *yone* in Japanese conversation, East Asian Pragmatics 22(2), 163-193. (2017)(査読有)

- 7) 植野貴志子「日本人の聞き手行動—『融合的談話』」日本語学 36(4), 116 - 127. (2017) (査読有)
- 8) 片桐恭弘・藤井洋子・植野貴志子・堀江薫・片岡邦好「異文化理解のための解放的語用論」社会言語科学 19(1), 224 - 230. (2016)(査読無)
- 9) 井出祥子「グローバル社会へのウェルフェア・リングイスティックスとしての場の語用論—解放的語用論への挑戦—」社会言語科学 18(2), 3 - 18. (2016)(査読無)
- 10) Kataoka, Kuniyoshi and Asahi, Yoshiyuki. Synchronic and Diachronic Variation in the Use of Spatial Frames of Reference: An Analysis of Japanese Route Instruction. Journal of Sociolinguistics 19(2), 133-160. (2015) (査読無)
- 11) 片岡邦好「『多様性』盛衰のうねりと言語問題について」人文知の再生に向けて, 171 - 204. (2016)(査読無)
- 12) 勝田順子・堀江薫「マレーシア語のパーティクル *kan* の多機能性—文法化の観点から—」関西言語学会論文集 (KLS) 35号, 49-60. (2015)(査読無)
- 13) 植野貴志子「融合的談話の『場の理論』による解釈」待遇コミュニケーション研究 13号, 18 - 34. (2016)(査読有)
- 14) Ueno, Kishiko. Review, Senft Gunter (2014) Understanding Pragmatics. English Linguistics 32(2), 454-465. (2015) (査読有)

[学会発表](計36件)

- 1) Fujii, Yoko. Pragmatics of *ba*: A cross-linguistic study of task-based interaction in Japanese, Korean, Thai, Chinese and American English. 第15回国際語用論学会 (Belfast, UK) (2017)
- 2) 藤井洋子「日英語の比較から見る『場』と日本語の諸相」(WS「場の語用論の試み—日本語のインテュイションに基づく解釈」)日本語用論学会第20回大会(京都工芸繊維大学)(2017)
- 3) 片桐恭弘「対話による場の共創：確認表現の使用と主導」(WS「場の語用論の試み—日本語のインテュイションに基づく解釈」)日本語用論学会第20回大会(京都工芸繊維大学)(2017)
- 4) Katagiri, Yasuhiro. Collective agency in ‘*Ba*.’ Fyssen Colloquium “Translation, Multimodal Interaction and Context: Cross-disciplinary perspectives” (Paris, France) (2017) (招待)
- 5) 堀江薫「『場』の語用論と文法の接点：日韓語のスピーチレベルの対比を通じて(WS「場の語用論の試み—日本語のインテュイションに基づく解釈」)日本語用論学会第20回大会(京都工芸繊維大学)(2017)
- 6) Kataoka, Kuniyoshi. BA-oriented management of institutional discourse: A case of radio program recording. 第15回国際語用論学会 (Belfast, UK) (2017)

- 7) Ide, Sachiko. How wakimae works: An explanation in terms of *ba* based thinking. 第15回国際語用論学会 (Belfast, UK) (2017)
- 8) Ide, Sachiko. Eloquence and persuasion are not valued by speakers of Japanese: Language and communicative interaction in terms of *ba* based thinking. Fyssen Colloquium "Translation, Multimodal Interaction and Context: Cross-disciplinary perspectives" (Paris, France) (2017) (招待)
- 9) Ide, Sachiko. *Ba* based thinking and unconscious dimension in communicative interaction. The Fifth International Workshop on the Linguistics of *Ba* (Waseda University) (2017) (招待)
- 10) 井出祥子「場の語用論は何故必要なのか」(WS「場の語用論の試み—日本語のインテュイションに基づく解釈—」ディスカッサント)日本語用論学会第20回大会(京都工芸繊維大学)(2017)
- 11) 植野貴志子「教師と学生の相補的關係性における役割志向の発話—自己の二領域性のはたらき」(WS「場の語用論の試み—日本語のインテュイションに基づく解釈」)日本語用論学会第20回大会(京都工芸繊維大学)(2017)
- 12) Yoko, Fujii. *Ba*-oriented representations of the world: From clause structures to interaction. Sociolinguistics Symposium 21 (Murcia, Spain) (2016)
- 13) Fujii, Yoko. A predicate-oriented language and pragmatics of *Ba*. The Third International Workshop on Linguistics of *BA*, Waseda University. (2016)
- 14) 藤井洋子「『場』の語用論—日本語に好ましい表現と『場』—」北京林業大学日本語教室(中国・北京・北京林業大学)(2016)(招待)
- 15) 藤井洋子「課題達成談話にみる自己と他者:日本語・英語・韓国語・タイ語の比較からの解放的語用」社会言語科学会第37回大会シンポジウム「異文化理解のための解放的語用論」日本大学(2016)(招待)
- 16) Katagiri, Yasuhiro. Collaborative construction of 'BA' in Consensus-building dialogues. The Fourth International Workshop on Linguistics of *BA*, Waseda University. (2016) (招待)
- 17) Katagiri, Yasuhiro. Exploration for linguistics of 'Ba.' The Third International Workshop on Linguistics of *BA*, Waseda University. (2016)
- 18) 片桐恭弘「動的対話相互行為としての文化理解」社会言語科学会第37回大会シンポジウム「異文化理解のための解放的語用論」日本大学(2016)(招待)
- 19) 堀江薫「名詞表現への選好性に見られる語用論的基盤の言語差—日韓語を対象として—」社会言語科学会第37回大会シンポジウム「異文化理解のための解放的語用論」日本大学(2016)(招待)
- 20) 堀江薫「『非従属節』のタイポロジー - 言語類型論研究と「言いさし」研究の接点 - 」第70回NINJALコロキウム(国立国語研究所)(2016)
- 21) 片岡邦好「日・英語のナラティブに見る空間的視点取りの異同について」社会言語科学会第37回大会シンポジウム「異文化理解のための解放的語用論」日本大学(2016)(招待)
- 22) Kataoka, Kuniyoshi. Temporal and regional variation of spatial expressions in Japanese wayfinding discourse. Sociolinguistics Symposium 21 (Murcia, Spain) (2016)
- 23) Ide, Sachiko. How and why personal pronouns in East Asian languages are not equivalent to those of European languages: Explorations from *ba*-based thinking. Sociolinguistics Symposium 21 (Murcia, Spain) (2016)
- 24) Ide, Sachiko. How and why "personal pronouns" in East Asian languages are different from European languages: *Ba*-based approach. The Fourth International Workshop on Linguistics of 'Ba' (Waseda University) (2016) (招待)
- 25) 植野貴志子「日英語の語りに対する共感的理解の様態—解放的語用論の視点—」社会言語科学会第37回大会シンポジウム「異文化理解のための解放的語用論」日本大学(2016)(招待)
- 26) Ueno, Kishiko. An interpretation of merging discourse in terms of *Ba* theory, The Third International Workshop on Linguistics of *BA*, Waseda University. (2016)
- 27) Fujii, Yoko. The theory of *Ba*: The world is interrelated, connected, and continuous—*Ba*-oriented culture and predicate-oriented language—. 第14回国際語用論学会 (Antwerp, Belgium) (2015)
- 28) Fujii, Yoko. *Ba*-oriented culture and predicate-oriented language. The Second International Workshop on the Linguistics of *BA* (公立はこだて未来大学)(2015)
- 29) Katagiri, Yasuhiro. Co-creation of 'Ba' in consensus-building dialogues. 第14回国際語用論学会 (Antwerp, Belgium) (2015)
- 30) Katagiri, Yasuhiro. Toward linguistics of 'BA.' The Second International Workshop on the Linguistics of *BA* (公立はこだて未来大学)(2015)
- 31) Horie, Kaoru. The pragmatic effect of attributive-final predicate forms: Japanese vs. Korean. 第14回国際語用論学会 (Antwerp, Belgium) (2015)
- 32) Kataoka, Kuniyoshi. In)compatibility of an interactionist tenet and cultural Kata form/shape/style/model. 第14回国際語用論学会 (Antwerp, Belgium) (2015)
- 33) Ide, Sachiko. Towards a balanced approach to cross-cultural communication: The perspective from *ba* based thinking. 第14回国際語用論

- 学会 (Antwerp, Belgium) (2015)
- 34) Ide, Sachiko. Why is spoken Japanese is more *Ba* oriented than English? The Second International Workshop on the Linguistics of BA (公立はこだて未来大学)(2015)
- 35) 井出祥子「グローバル社会におけるウェルフェアリングイステイクスとしての「場の語用論」— 解放的語用論への挑戦 —」社会言語科学会第36回大会京都教育大学(2015)(招待)
- 36) Ueno, Kishiko. Speaking as parts of a whole: *Wakimae* utterances in Japanese conversation. The Second International Workshop on the Linguistics of BA (公立はこだて未来大学) (2015)

[図書](計11件)

- 1) Horie, Kaoru. Subordination and insubordination in Japanese from a crosslinguistic perspective. In Pardeshi, Prashant and Kageyama, Taro(eds.), Handbook of Japanese Contrastive Linguistics. Mouton. pp. 697-718. (2018)
- 2) Ide, Sachiko and Kishiko Ueno. Politeness in Japanese. Oxford Research Encyclopedia of Linguistics. Oxford University Press. (<http://oxfordre.com/>) (2018)
- 3) Ide, Sachiko. Introduction to “The logic of politeness; or, minding your P’s and Q’s.” In Sutton, Laurel (ed.), Context Counts: Papers on Language, Gender, and Power. Oxford University Press. pp. 33-35. (2017)
- 4) 片岡邦好「創発的スキーマと相互行為的協奏について—『問い』と『相づち』による構造化を中心に—」鈴木亮子・秦かおり・横森大輔(編)『話しことばへのアプローチ—創発的・学際的談話研究への新たな挑戦—』ひつじ書房 pp. 181-211. (2017)
- 5) 藤井洋子「『うるさい』と‘Be quiet!’どう違う? - 場中心と人間中心 -」『不思議に満ちたことばの世界・上』高見健一・行田勇・大野英樹(編)開拓社 pp. 125-129. (2017)
- 6) 片岡邦好「マルチモーダルの社会言語学—日・英対照による空間ジェスチャー分析の試み—」『対照社会言語学』井上逸平(編)朝倉書店 pp. 82-106. (2017)
- 7) Horie, Kaoru. The attributive versus final distinction and the manifestation of “main clause phenomena.” In Japanese and Korean noun modifying clause constructions. In Matsumoto, Yoshiko et al. (eds.) Noun-Modifying Clause Constructions in Languages of Eurasia, pp. 45 - 57. (2017)
- 8) 藤井洋子「日本人のコミュニケーションにおける自己観と「場」— 課題達成談話と人称 詞転用の分析より—」藤井洋子・高梨博子(編)シリーズ文化と言語使用第1巻『コミュニケーションのダイナミズム』ひつじ書房 pp.1-37. (2016)
- 9) 藤井洋子・高梨博子(編)シリーズ文化と言語使用第1巻『コミュニケーションのダイナミズム』ひつじ書房(2016)
- 10) 片岡邦好「雑談とゴシップのはざま— 規範と逸脱から考える—」村田和代・井出里咲子(編)『雑談の美学: 言語研究からの再考』ひつじ書房 pp. 281-307. (2016)
- 11) 堀江薫「日本語の「非終止形述語」文末形式のタイポロジー: 他言語との比較を通じて」益岡隆志(編)『日本語研究とその可能性』開拓社 pp. 133-167. (2015)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤井洋子 (FUJII YOKO)
日本女子大学・文学部・教授
研究者番号: 30157771

(2) 研究分担者

片桐恭弘 (KATAGIRI YASUHIRO)
公立はこだて未来大学・システム情報科学部・教授
研究者番号: 60374097

(3) 研究分担者

片岡 邦好 (KATAOKA KUNIYOSHI)
愛知大学・文学部・教授
研究者番号: 20319172

(4) 研究分担者

堀江 薫 (HORIE KAORU)
名古屋大学・人文学研究科・教授
研究者番号: 70181526

(5) 研究分担者

井出 祥子 (IDE SACHIKO)
日本女子大学・文学部・研究員
研究者番号: 60060662

(6) 研究分担者

早野 薫 (HAYANO KAORU)
日本女子大学・文学部・准教授
研究者番号: 20647143

(7) 研究分担者

植野 貴志子 (UENO KISHIKO)
順天堂大学・スポーツ健康科学部・准教授
研究者番号: 70512490